

K-689

昭和四十二年三月

月布川下流における原始時代の遺跡調査報告書

—古式石器の出土地—

大江町教育委員会

昭和四十二年三月

月布川下流における原始時代の遺跡調査報告書

—古式石器の出土地—

山形大学教授

柏倉亮

沖津常太郎

吉

序文

太古の夜は明けはなれようとしている。まさに黎明期である。朝日連峯に源を発した月布川縁辺の朝霧の中から、カツチンカツチンという石を割る音が響きはじめたとする。このひびきこそ人類最初の生活を嘗む労作の響きであり、人類文化への一步でもあり、それは悠久な昔日の姿でもあつた。

吾が大江地区に在住した人々が最初に残したものは何であつたか、それは即ち石器文化である。それこそ人間が生きるために製作した最初の遺物である。吾が町の歴史もそこから始まつたのである。

頁岩を自分の知恵によつて意図のままに打ちくだき、これで食物を切り、又は砕き、毛皮を鞣^{なめ}して衣類を調製はしたが、まだ鉄器や土器の使用は知らなかつた。この黎明期においては、石こそ生活をきりひらく道具であり根源でもあつたのである。

こうした人類の最初の生活を解明すべく、雄々しくも研究に取り組んだのがこの研究である。大江町に住む吾々は、誰でも歴史の始めを知り度いと念願していると共に、こうした先人の跡を究め、悠久な歴史を反省することによって、将来の町づくりに多く教えるもの、いわゆる「故きを温ねて新しきを知る」ものであることを確信する次第である。

今回、山形大学柏倉教授・沖津常太郎氏を総帥として、大江町の黎明期の研究にとりくまれ、ここに第一回研究報告書が上梓されると至りました事を、町民の皆様と共に限りない悦びとするものである。

最後に、この研究に努力下さった柏倉教授・沖津先生はじめ、直接推進に努力下さった諸氏に対し、深甚なる謝意を表するものである。

昭和四十二年三月

大江町長 松田兄弟郎

序文

ある日のことであった。この研究の纏めを委嘱した沖津先生が、字下原の地層調査に来られるというので、朝から準備していた。下原の現場は月布川を前にした小見向かいで、標高一二〇mの河段丘であった。一ヵ所の調査を終わり、杉林の中の段丘で一服して後、傍の指示された地点にシャベルを突っ込んだ。真っ黒な土を六〇匁も掘つたと思われた頃「漸移層だ!」との声と共に、一つ、二つ、三つと続けざまに数個の細長い石片が表土に並べられた。石片の赤黒い土をこすつていた沖津先生が「この三片までは石刀型剝片で、石質もよく刃が鋭い、裏の打瘤も完全だ」と説明。急に元気づいてスコップを動かす高山先生の頭も顔も汗の筋を引いて流れている。佐藤先生の吐く息も荒い。その頃シャベルの下は赤土層であった。基盤の底土であろう。半径五〇匁にも満たない場所から、求めていたものがズバリ出土するとは奇跡である。

私は考えた。大江町の歴史の始めだなんて、華やかに騒ぎたてているが、実際は全く地味な仕事である。度重なる踏査と、シャベルと汗との闘いが集積して、結果されるものであることを如実に知った。

さて、皆さん御苦労様でした。柏倉先生はじめ諸先生の適切な御指導と、直接これに当たられた方々の労苦と、喜んで御手伝い御支援下さった方々の温かい芳情とによって、今回第一次的報告書の完成するまでに至った、その勞に心から敬意を表するものであります。

研究のとり纏めを委嘱した柏倉・沖津両先生。地学指導に当たられた青木先生。作図と石器の解説にあたられた宇野先生、写真に専念された菊地氏。研究グループの高山・佐藤両先生。研究に御支援下さった加藤(稔)先生。調査に際し温かく迎えて下さった地主の方々。資料を提出下さった渡辺(正)氏。その他御援助協力下さった諸氏に、厚く御礼申し上げる次第であります。

昭和四十二年三月

大江町教育委員会
教育長 渡辺惣次郎

目

次

大江町長 松田兄弟次郎 一

大江町教育長 渡辺惣次郎 二

序文
序言

四

本文

一、研究のいきさつ

六

二、遺跡周辺の地質・地形

六

三、出土地の概況

一二

四、出土石器

一一

五、附記

三〇

六、むすび

三六

例　　言

一、この研究にあたっては、大江町当局からの委嘱により、山形大学教授柏倉亮吉の総合的な指揮並びに指導によつて進められ、報告書については沖津常太郎がまとめた。

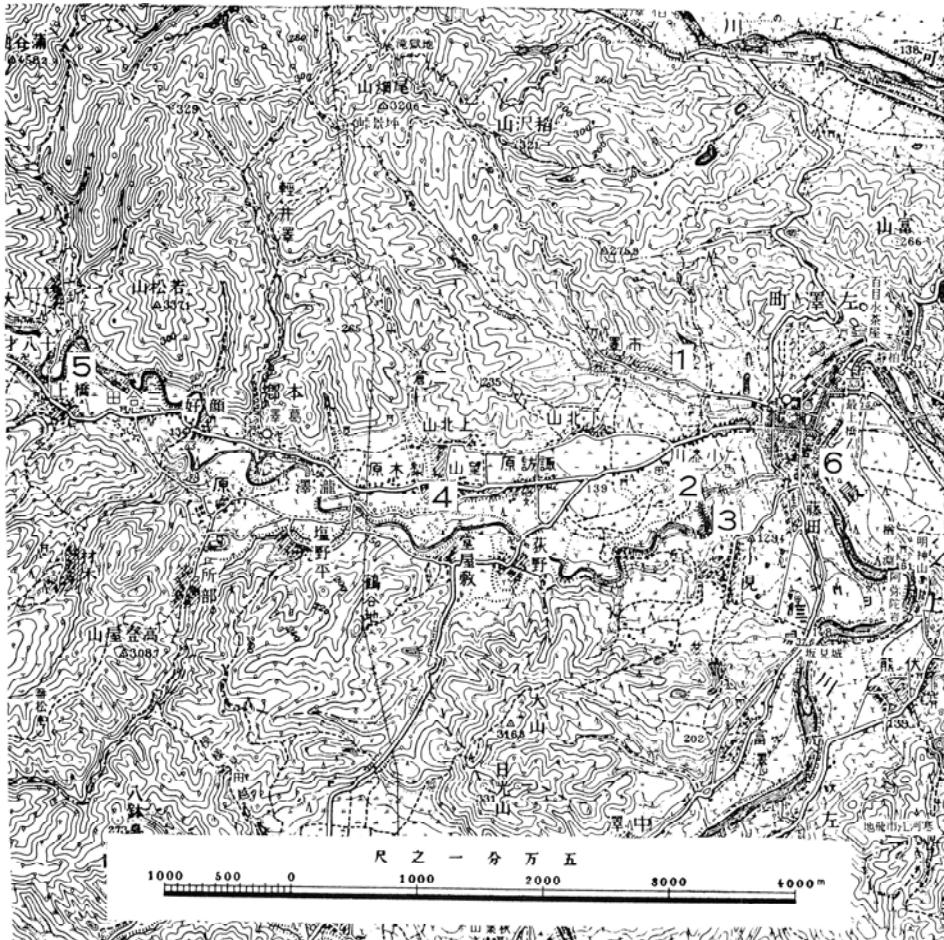
二、地学については山形大学の青木和子博士の指導をうけ、出土品の考証並びに作図については、直接宇野修平があたり、写真に関しては、菊地正道が中心となつて進め、多くの資料を得た。

三、研究グループ活動に関しては高山法彦が主となり佐藤如男が副となつて、直接遺跡の実地調査に精進し、六〇回にわたる踏査の結果についてまとめたものである。

四、研究支援者として特に加藤稔、その他西川光輝、近野正司等各氏の幅広い応援を賜った。

五、この研究は大江町における、歴史のはじめを探究しようとして出発したものであるが、勿論完成されたものではなく、中間発表的なものである。従つてここに対象となつた遺跡の全部が、必ずしも先繩文時代のものであるとは限らない。要は今後に多くの課題を残しているのである。特に正式な発掘による調査と、第四紀層の地質調査と相待つて進められる部面の多いことを附言する。

第 I 図 月 布 川 下 流 図



- | | |
|----------|---------|
| 1. 庚申山遺跡 | 4. 望山遺跡 |
| 2. 下原遺跡 | 5. 橋上遺跡 |
| 3. 小見遺跡 | 6. 向原遺跡 |

一、研究のいきさつ

この研究は、昭和四一年六月二六日、大江町庚申山の南麓（海拔一四八m）、宇下山田已三六四番地森村義三郎氏所有の果樹園整地のため盤下げした場所に、多数の頁岩剝片が散在しており、随伴して出土すべき土器は一片もないことに不審をいだいた高山法彦は、若しや先繩文時代のものではないかとの観点から、菊地正道、佐藤如男等の研究同志と協議の結果、前年度において小漆川城跡の研究で関係が深かった筆者に連絡、柏倉先生の指導のもとに研究の歩を進め、海拔二七五米に連なる周辺、市の沢の裏山など限なく調査し、更に小見・下原・望山・漆川・堂が原・羽黒・壇・橋山・橋上・向原など、月布川下流一帯を調査し、更に進んで寒河江市十二堂・同高瀬山・同長岡山・同平野山・同陣ガ峯。西川町間沢の去手呂など抜渉すること六〇余回に及んだが、そのうち庚申山・小見・望山・下原・向原・橋上の六カ所においては、一応の成果をおさめ得たので、その結果をここに報告書として第一次的発表に踏み切った次第である。

ここで研究のいきさつについてもう一つ付言すると、昭和四一年七月二十四のことである。前年度に完成した小漆川城跡・巨海院山門誌に関する反省会が、巨海院会場で開催されたが、この席には松田町長、町會議員鈴木正美、同村上広志、教育長代理安藤光蔵の諸氏も会合したが、寒河江工業高等学校附近から、先繩文時代の

ものと予想される石器が出土したことの話題となつた際、松田町長から「石器時代における先繩文の遺跡は、海拔と或る点まで一致していると聞くが、吾が大江町から出土しないと言うのは、要するに研究が足らぬからではないか?」。この一語は小漆川城跡研究者にとっては、將に冷水三斗の「喝」であつた訳である。

由来、小漆川城跡研究員の次の課題は、大江左沢城跡研究だった訳であるが、町長の一語によつて、大江町そもそもからのやり直しも意義あるものと考え、原始時代の研究を進めることに話がまとまつたのである。

そこで現在剝片が出ている下山田の丘陵に対し、天保一二年に建立した庚申堂が祀られているところから、松田町長の決定によつて、庚申山云う、天保一二年に建立した庚申堂が祠られているところから、松田町長の決定によつて、庚申山と言う名称が誕生したのである。然し庚申山と言えば、如何にも独立した高い山の様な印象を与えるが、地理的に見れば、月布川及び小漆川によつて成立した河段丘に過ぎないのである。

二、遺跡周辺の地質・地形

月布川は朝日山地の小朝日岳に源を發し、東北方に向つて流れ、溪流となつて浸蝕崖を縫いながら大江町古寺を過ぎ、神通境の名勝として知られる渓谷となつて大江町青柳まで一三km。ここで進路を東方にかえ、蛇行すること一三・五kmにして大江町左沢附近で最

上川と合流する。

月布川沿岸における地質・地層の大様について見ると、西方朝日山地花崗岩類を最下部とし、東方下流に向って傾斜しながら、第三系金山・水沢・古口・橋上・大谷・稻沢山等の層序で、つぎつぎと若い地層が重なって、最後に河口附近の一帯は第三系で最も新しい左沢層によつて被覆されている。左沢層の厚さは四〇mと四五mと言われ、礫質砂岩・浮石質砂岩・凝灰質砂岩を主体とし泥岩を交えている。

橋上以西の地においては、地殻の変動特に褶曲作用によるものや、南北に走る数条の断層線のため、地層の繰り返しが行なわれ、場所によつては背斜構造となつてゐるところもあり、こうした場所の両翼は著しく急な斜面となつており、一層複雑な構造を示してゐる。断層は概して南北に走る数条の線が主をなし、小数の東西に走るものを見切斷している場所もある。

ここで、「山形県地質図」によつて月布川沿辺の地層の順位を挙げると、

番号	地 层												
1	朝日花崗岩層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層
2	金 山	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層	層
3	水 沢	古 口	沢 口	古 橋	水 古	橋 水	古 橋	橋 大	稻 沢	左 沢	山 左	谷 左	沢 層
4													
5													
6													
7													
8													
9													
10													
11													
12													
13													



第2図 青木和子先生の地質学指導一崖は砂利取り場一

青木博士 沖津 佐藤 沖津（嘉）

となつており、このうち水沢層は3・5・8。古口層は4・6・9。橋上層は7・10と繰りかえしている。

又、山形大学紀要第四卷第二号（昭三二・五）に発表した山形理



第3図 柏倉教授の現地指導—左沢層と酸化砂鉄層の検討—

沖津 佐藤 柏倉 沖津（教） 高山

氏の原図による青木和子氏の研究「月布川沿岸の新第三紀堆積岩に関する地質学的研究」には、次のような層序が示されている。

番号	地層	巾層
1	月岡層	1.4K
2	水沢層	1.4K
3	間沢層	0.8K
4	水沢層	0.6K
5	綱取層	0.2K
6	間沢層	1.9K
7	月岡層	0.2K
8	水沢層	0.7K
9	月岡層	0.2K
10	水沢層	0.7K
11	綱取層	0.1K
12	間沢層	0.4K
13	橋上層	0.7K
14	谷層	1.5K
15	大稻沢層	1.7K
16	小山層	1.0K

右の表の如く、更に詳細に区分して研究されたものであるが、地層の繰り返しについては、月岡1・7。間沢3・6・12。水沢4・8・10。綱取5・11となつていて。

月布川沿岸は前述の如く先第三紀の花崗岩類と第三系中新世の橋上層をはじめとする諸層と、第三系鮮新世の稻沢山及び左沢（小見）の両層が基盤をなしており、その上層を第四系の洪積層・沖積層などが表土となつて被覆しているのである。

こうした月布川の沿岸は地形的にみて、五m～一〇mの低位段丘。二〇m～三〇mの中位段丘。五〇m～七五mの高位段丘をかまえるが、地質的には、これらの段丘は砂礫の堆積を主とする河段丘で、低位段丘には泥炭層を挟んでいる。

ここで本遺跡と直接関係をもつ月布川下流における、第四系につ

いて考察してみたい。

月布川の沿辺は、前述の如く複雑に重なり合った第三系の地層が基盤となつて、第四系堆積層によつて被覆されている。特に洪積世以来、上流で浸蝕された碎屑物が下流に運搬され、河口附近に扇状地堆積層が形成されるのが一般的であるが、月布川においても河口から五km上流に当る橋上附近から流域が喇叭状に広がり、不完全ながら扇状地の様相をなし、河口では二km程度に広がりを示している。

この地帯は両岸に河段丘が発達しているが、その構成堆積物は前述の通り砂礫層で、場所によつては砂層、ローム層を含んでいる。この第四系堆積物は、或る時代に河口一帯を埋めていた事情が考えられる。即ち堆積が地殻の隆起作用と相待つて、その最盛期には、現在における河口床よりも七五mの高さに達していたらしく、その名残りとして両岸沿辺の標高一八〇mの山腹や山頂に河成堆積としての砂礫が認められる。

かくの如く、一時は最盛期を示した堆積層も、其の後永い年月にわたる浸蝕・運搬作用によつて最上川本流に土砂礫を送り、渓谷造成作用が拡大し、河床も低下して、現在の如く両岸に河段丘を残したものと考えられる。而して初期における原始民族は、好んでこうした河口に近い河段丘を生活の場としたらしく、庚申山・小見・望山・下原・向原・橋上の遺跡も、この河段丘に含まれている。

さて、こうした遺跡を含む両岸の河段丘について、その生成され

た順序について比較すると、右岸における河段丘は左岸に比し早期に形成されたものと見ることが出来よう。即ち右岸の小見地帯の河段丘は單的に月布川によつて形成されたのに比し、庚申山を含む左



第4図 庚申山ローム層調査

沖津（教） 佐藤 柏倉 沖津



第5図 小見ローム層調査

—黒土の表土25cm～30cm下が茶褐色のローム層—

岸の河段丘は、月布川の外に小漆川（市の沢川）の浸蝕・運搬作用と合わせて造成されたものであり、小漆川は月布川の支流として水量も少なく、造谷作用が遅れ、河谷も狭く、庚申山を含む上位段丘

一帯は、発達した浸蝕崖を残している。更に遺跡そのものについて見ても、月布川床から小見遺跡までの〇・三kmに比し、庚申山遺跡は一・一km。小漆川床から〇・三kmの距離である。又、月布川口から距離についてみても、小見遺跡は〇・七五kmに比し、庚申山遺跡は一・五kmのはなれを示している。

これから述べようとする三つの事項については、顕微鏡下による精密な検査を終えていないので、一概には言えない訳だが、庚申山の頂点標高一七五m一帯に、火山灰を含んでいると見られる、厚さ一m～五〇cm程度のローム層状のものが堆積し、段丘砂礫層の上に冠っている。然しこの層は左岸中位層の小漆川床まで見られない。

一体第四紀においては、本県内の鳥海・月山・葉山・船形・白鷹・蔵王・吉妻等の諸火山が激しく活動し、多量の噴出物が排出し、時には泥岩も流出したと見られ、特に葉山火山は熔岩流と塊泥流の熔岩互層が見られ、紫蘇輝石安山岩・普通輝石安山岩・複輝石安山岩から成り、周辺に碎屑物を多量に抛出したと見られているが、ここで火山噴出との関係について考察すると、右岸小見遺跡を含む中位段丘一二五mの場所を試掘の結果、前述した庚申山頂におけるローム層状のものと同種のものと見られる層が発見されたが、この層もあり、下位段丘にはこの層は認められない。

若し、両ローム層が同類のものと仮定した場合においては、右岸

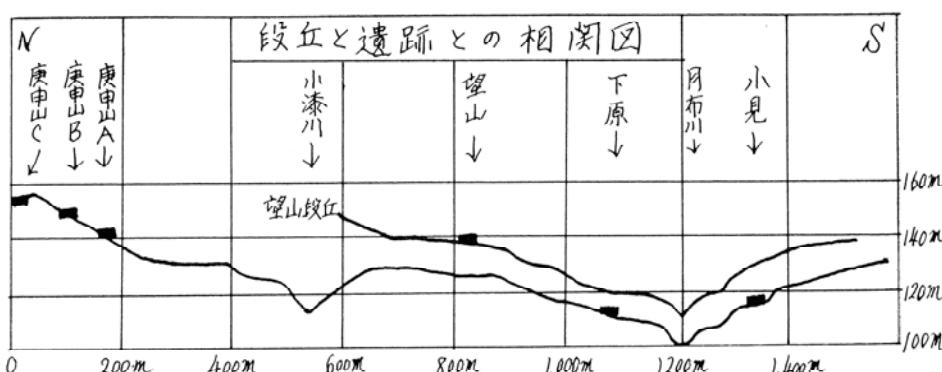
における小見中位段丘が形成された後の降灰があつたものと考えられ、この頃左岸においては、ようやく上位段丘が形成されつつあることになる。従つてその後において小漆川による中位、下位の段丘が造成されたものと思われる。然し、これを以て直ちに小見・庚申山両遺跡に対する年代的な新旧の基準とすることはできないが、一つの参考資料と言えるであろう。

さて、月布川の特徴はと問えば、結局成熟された河川であると答えるであろう。すなわち、寒河江川・朝日川・野川の様ないわゆる荒川に比し、河底の落差が少なく、且つ蛇行帯も十分発達し、この蛇行によつて沿岸には自然の貯水場が各所に出来てゐるので、これが上流における森林の発達と相俟つて、洪水の災害を防いでいる。かつて、旧制山形高等学校の安斎教授が、土地利用のため附近の町村民が月布川の蛇行帯を直線的に直してゐる工事を見て、「この工事によつて土地が利用される反面、水による災害を覚悟しなければならない。」と指摘したのは、この間の事情を物語るものであらう。

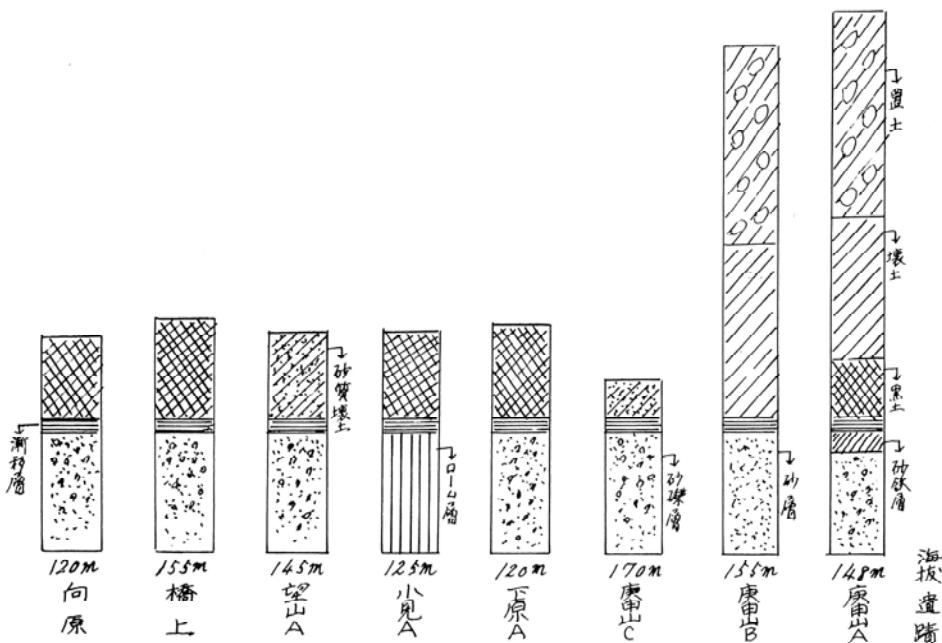
又、川が落ち着くため、永い年月を費して成熟期にはいつただけに、沿岸に河段丘がよく発達し、地味が肥沃で樹木もよく繁茂したから、初期の人類が好んで生活の場としたものと考察される。

ここで小見・下原・望山・庚申山遺跡と、標高並に何段丘との関係について表示すれば第6図の如くなる。又、ここにとりあげた遺跡の地質層序を表示すれば第7図の如くなる。

第6図 段丘と遺跡との相関図



第7図 遺跡の層序比較表



三、出土地の概況

(一) 望山遺跡

望山遺跡は、大江町大字望山、農業協同組合倉庫の西南方五〇m、なだらかに南方に傾斜する河段丘の林檎園の中にある。ここは月布川河床からの比高三五m、標高一四五m、月布川河段丘の中位段丘にあたる。なお、月布川からの距離八〇〇mである。

地層試掘の結果、第一層表土二〇cm～三〇cmの砂質壤土その下に第二層五cm程度の漸移層が認められ、第三層は河段丘を構成している砂礫層である。

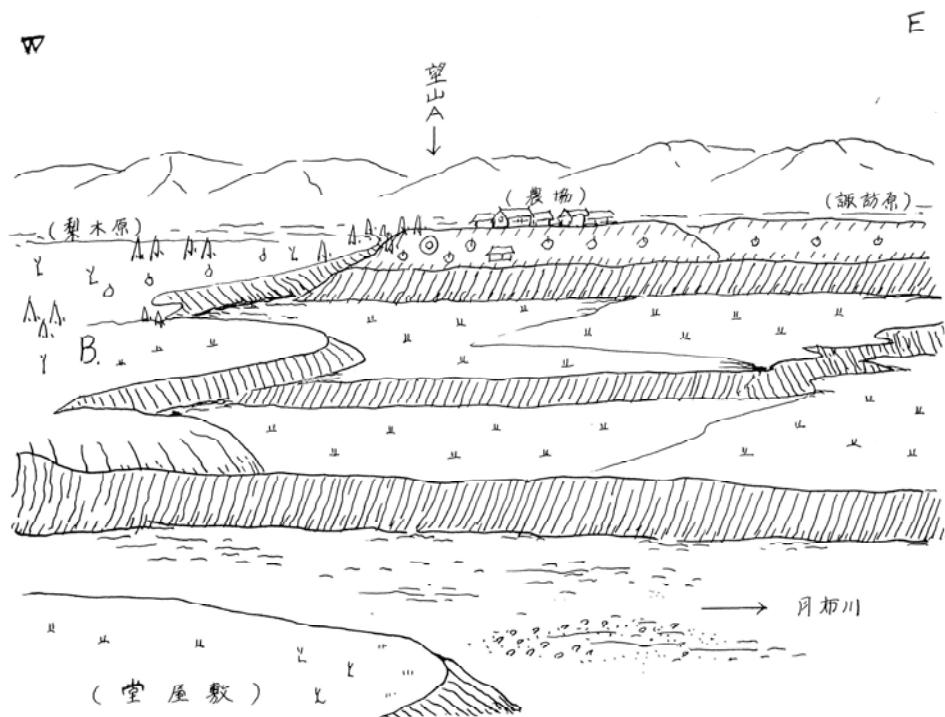
先年農協の倉庫を建設した際、多くの石器の出たことを、地もの林勘次郎氏が証言しているが、大江町立東部小学校に保存されているのがこれであると言う。

四章の出土石器の項で述べている如く、望山遺跡からは、期待の持てる石核と石器が出ている。

(注)

人類の歴史を地質生成年代と比較した場合、その間には大きな開きがある。第三系で最も新しい左沢層でさえ、一、五〇〇万年前。第四紀層生成のはじめは、一〇〇万年～六〇万年と云う。この報告書で取扱っている古式石器は一応五、〇〇〇年～一五〇、〇〇〇年以前であろうと思われるものを対象として進めた。

第8図 望山遺跡と月布川河段丘



第9図 望山河段丘と遺跡

—中央建物が農協、その左下が遺跡—

第10図 望山遺跡



—林の間の向こう側が月布川—

菊地 沖津（教） 沖津 柏倉

あるから、原住民生活の場となつたものであろう。今後正式に発掘を行なえば、月布川下流としては有望な地帯と考えられる。
地層試掘の結果、第一層は二四cmと三〇cm。第二層はやや褐色が



第11図 小見河段丘と遺跡

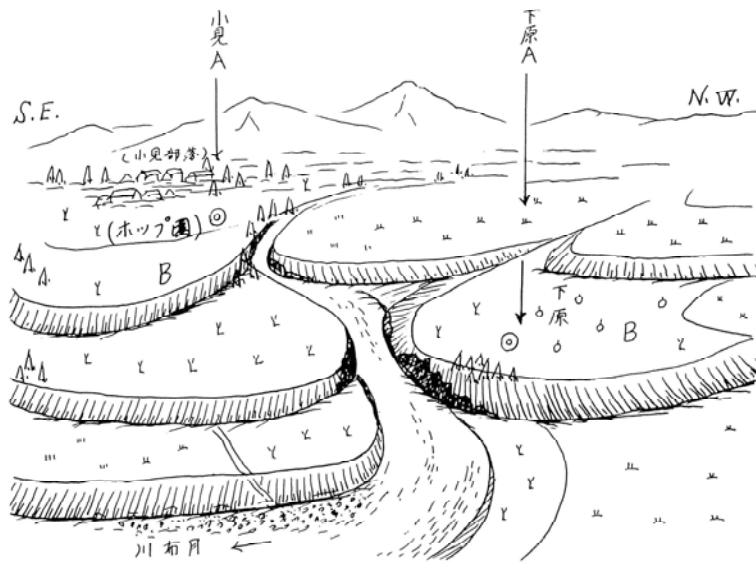
—中央第三河段丘が遺跡—

(二) 小見遺跡
小見A遺跡は大江町大字小見部落と月布川の中間に位する。南から北へなだらかな河段丘の斜面が広がるなかの中位段丘である。河床からの比高二〇m、標高一二五m。数年前この地にホップ園を經營するため、ブルトーラーで均したのであるが、この時表土及び底土が攪乱され、剝片や石器が放出されたらしく、浮き出たものについて表面採取が行なわれたのである。

附近は月布川河段丘として成立も古く、場所も広く、高燥な地で

かつた漸移層、第三層はローム層で、第四層が河段丘を構成している砂礫層であることは、附近の欠け崩れ場所から推考出来る。

第12図 小見遺跡と月布川河段丘



第13図 貢岩礫の検討



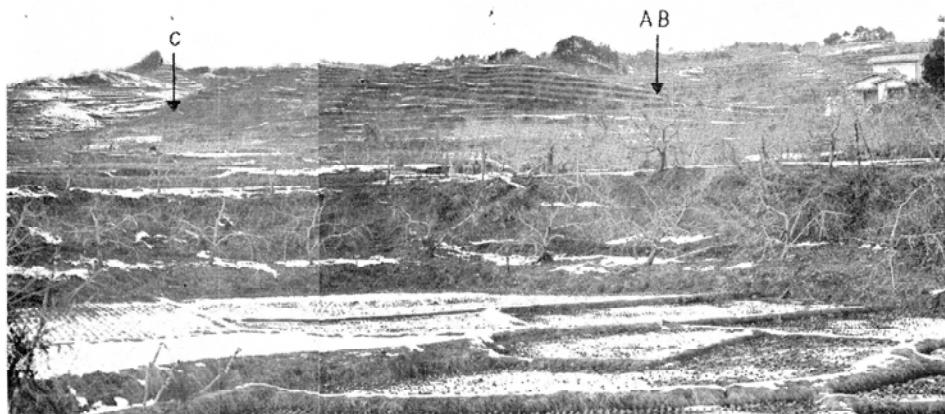
—砂利取り場前—

沖津 柏倉 佐藤 近野 安藤 高山 西川

(三) 庚申山遺跡

① 庚申山貢岩礫包含層について

庚申山を構成している堆積砂礫層は中腹に露出しており、古来左沢・小漆川地区民の砂利取り場となってきた。特に庚申池の築堤に際しては、主としてこの砂礫によつて完成された。この層の下部は



第14図 庚申山附近の河段丘 一中央円形の丘が庚申山、ABCは遺跡一

第三系鮮新世左沢層で、砂利を取つたあとを平に均らして、一ヘクタール程度の畑地としている。

現在の砂利取り場は六mと八mの層で、山頂にあたる西に向かつて崩されつある。この層の中には直径一〇cmと三〇cm程度の頁岩礫がごろごろ包含されている。この礫

は概して黄褐色で、中には茶褐色の美しい縞模様が入つたものもある。概して色が薄いのは有機質分の含有量が少ないためであると言えよう。然し他の遺跡で出土するチョコレート色や黒色のものはない。

石器を作る硬質頁岩は、一般に奥山の渓間で長い間晒され、凹凸が礫面に出来て、虫に食い荒されたように古色をおびたものが珍重されているが、こうした礫を割つてみると、たとえ表面は白っぽけた色でも、中の方はチョコレート色、又は黒色のおびたものが多い。従つてこれを実際利用する場合は、一応外皮を剥ぎ取つてから石器に割るのである。然るに庚申山の頁岩礫は土中に埋まつていたため、礫の表面は晒されておらず、多くはすべすべした“はだ”になつてゐる。それで庚申山頁岩礫は表皮がそのまま使用に耐えるので、礫面をつけたままの石器や剝片が多い。然し、チョコレート色のものに比し硅化度も劣り製作にあたつて剝離の鋭どさに欠けてい



第15図 酸化砂鉄鉱 (庚申山A)

剝離の鋭どさに欠けてい

るので、必ずしも最適とは言えない。けれども材料は無限と言える程あり、何時でも自由に得られる便益から、附近に在住した初期の住民は好んで使用したであろう。

寒河江市長岡山で標高一五五mの地点にも、庚申山と共に通した頁岩礫を含む砂礫層があり、製作様式も共通したものが採取されている。これ等の剝片が甚だしく粗雑な印象をうけるのは、剝離の技術の外に、石質の劣ることが考えられる。庚申山採収の勝れた剝片・石器は、何れも石質そのものも勝れていることに気付くのである。

② 庚申山A 遺跡

この遺跡は庚申山河段丘の東部山麓標高一四八mの地点にあり、この場所に達するには、巨海院山門附近から通ずる農道を北に進み、庚申溜池碑附近で分岐してから傾斜している農道を四〇m程西に昇り進めばこの道路の下側にある。この地は左沢の森村儀三郎氏所有の桃園で、剝片の散在について高山法彦が気付いたことは前述の通りである。

遺跡の地層をみると、第一層六〇cmは農道工事の際に置き土したものらしく、攪乱されたものである。第二層はいわゆる表上層で五〇cm。第三層は有機物を多量に含む真っ黒な土層で三〇cm。第四層は酸化砂鉄層（褐鉄鉱）で一〇cmと一五cm。その下は河段丘を構成している褐色の砂礫層となっている。

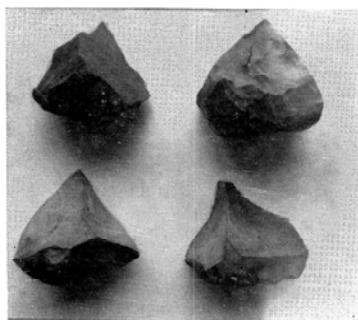
勿論その下が第三系の左沢層で、この地の基盤となっていること

は庚申池附近の欠け崩された場所によつても推測し得る。



第16図 庚申山遺跡と月布川河段丘

この褐鉄鉱層に喰い込んだ形で、細長い一〇cm程度の礫を縦に二



第18図 三角石核
—庚申山A出土—



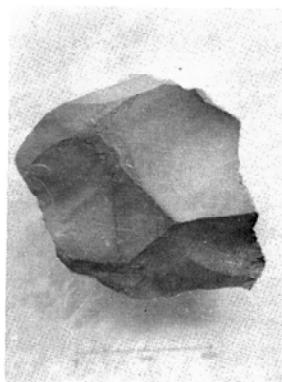
第17図 庚申山A遺跡

—石灰で描いた円は酸化砂鉄鉱層—

つ割りにした（ポイント形）ものが十数個。その上は頁岩礫から剥ぎとった残りの、いわゆる三角石核が八個、蛤状の刃器型剥片八個、削器と予想されるもの五ヶ一〇個出土したが、当遺跡を初めて見た時は、何となく石剥ぎ場の様な印象をうけた。

ここから出土したものの大部分は、酸化砂鉄

層のため褐色に染まっている。この特徴としては何れも粗製で石質も劣る。それは当良質の頁岩含有層が露出していなかつたためであろうか。それとも試験的に多くの種類の頁岩を剥いでみた場所であろうか。尚附近一帯から土器は一片も出土しない。



第19図 庚申山出土石核
—蛤形の剥片（石刀）を剥いだあとを残す石核—

③ 庚申山B遺跡

この遺跡は庚申山河段丘の中腹標高一五五mの地点に位する。A遺跡の西五〇m程度西方に昇つたところで、天保一二年と記録された庚申万年塔があり、附近は平坦に均らされているが、もともと丘の中腹に細長い平地が等高線上に伸びていたのであろう。

昭和四二年三月四日庚申塔前四mの地点を地質調査のため試掘したところ、上部第一層は七五cmで攪乱され置き土となつており、黃褐色の底土が疎らに交っている。第二層は六〇cmでいわゆる表土。これにはA遺跡に見られた様な有機質を含んだ真っ黒な腐蝕土は見あたらない。砂質の壤土が続き荒い砂層に移行するが、その境が五

cm 程度の漸移層となつてゐる。即ち第三層である。第四層は粒の荒い砂層で褐色を帶びてゐる。その下部が砂礫層であることは附近の欠け崩れた場所に徴し推考出来る。

この第四層に喰い込んだ形で七*cm* ~一〇*cm* 程度の刀器型剝片四個（第22図）が出土した。この中腹B遺跡附近は庚申山地区中では最も整った石器が採取された地帯で、舟底型状の石器二個、その他多

数の剝片、

石器類が採
収された。

思うに、
当時この附

近に比較的

良質の頁岩
礫を含んだ

出していった
であろうか、

砂礫層が露
出していた

べすべした
もので光沢

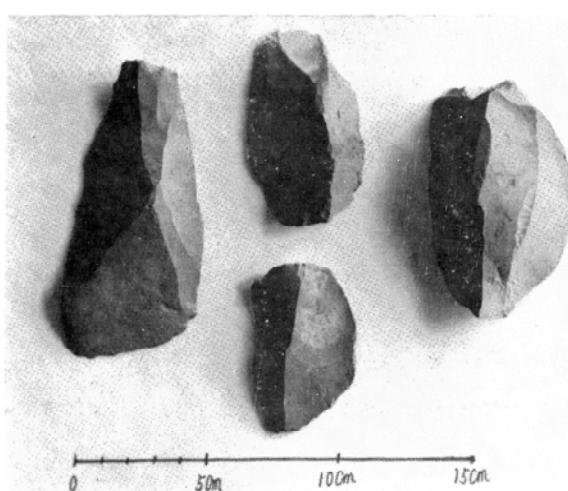


第20図 庚申塔前の地層調査

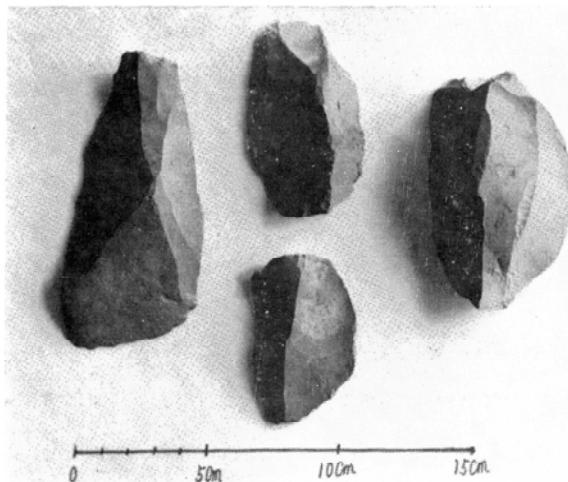
この時第21図の石刀型剝片出土

沖津（教） 沖津 高山 佐藤 柏倉

がある。



第21図 庚申塔前地層調査のため試掘の実際



第22図 前図庚申山B遺跡出土の石刀型剝片

この土地独特の貞岩を好んで材料としたようである。勿論舟底型状の石器もこれを材料とした。

④ 庚申山 C 遺跡

庚申山の西端は鞍部になつてゐる。この鞍部の南及び北の斜面一帯は窪地で、湧泉帯となつており、数カ所に優れた清水がコンコンと湧き出している。北斜面一〇m程下つたところの二カ所の清水からはじまつてゐるが、この比較的湿度の高い地帯を利用して林檎園が經營されている。

この地が特に湧泉帯となつてゐるのは、鞍部の窪地に浸透した雨水が、地下の地盤となつてゐる左沢層、又は河成沈澱粘土層などのために、その上部に滞留したものが外部へ湧出するものであるらしく、しかもこの附近の表土層は極めて薄く、下層は砂礫層になつてゐるので、浸透作用を容易にしてゐるようである。

こうした鞍部の湧泉に恵まれてゐる地は、古来人間生活とのつながりを示し、初期における原住民の生活には好個の場であつたにちがいない。

附近一帯から庚申山頂にかけて多くの剝片が採取されたが、特に湧泉帯附近には刃器型剝片が多い。地質調査のため試掘の結果、腐蝕質を含んだ表土層の5cm以下は漸移層5cm程度、その下は庚申山河段丘を構成している砂礫層である。剝片は第二層の漸移層に第25図写真の如く、同一平面に居て砂礫層に喰い込む形となつてあつ

た。

尚、庚申山一帯に土器は見当らない。



第23図 庚申山鞍部の地質調査

—表土はうすいんだね—

沖津 佐藤 柏倉



第25図 剃片土中のあり方
—庚申山D、底土にくい込んで形で散在していた—



第24図 庚申山鞍部の湧泉地帯
—普通田面から比高25mのところにも出がある—

四・出土石器

(+) 望山遺跡の石器類(第26・27図)

一、縦長剝片

現在まで、望山遺跡から採集された剝片類は約二〇点である。二点を図示した(第26図1・12)。一〇センチ前後の比較的大形の剝片群と五六センチを標準とする小形剝片群とに大別出来る。なんらかの二次加工の施されている剝片は四点である。

1はやや部厚い剝片である。打面(上端の平な部分)はほとんど残らず、打痕がわずかにみられる。正面の左側縁に角度の浅い二次加工がある。主要剝離面(背面)には二次加工が及ばない。先端部は意識的に折ったのかどうか不明である。

2は小形の比較的、形の整った縦長剝片。正面には二条の稜線が平行して走る。先端部に押圧剝離が加えられ、縦形搔器(エンドスクリーパー)のような形態をとる。長さ五四mm。

3は大きな打面をもつ不整形剝片。剝離角は一二〇度。4・5は基部の欠損した剝片。

5の背面(主要剝離面)先端にリタッチ(整形加工)が加えられている。6は正面中央に一条の稜線が走る。先端は蝶番破碎(ヒンジフラクチャ―)をなし、自然面を残す。

9・10は不定形の中形縦長剝片。9は打面が不明で部厚い。自然

面が左側縁に観察される。10は扁平な剥片。幅広の、打面の小さい不整形をとる。11は正面両側縁に自然面を大きく残した幅広の剥片。打面は比較的小さく主要剥離面の湾曲が著しい。二次加工は側縁、背面にも見られない。

12は、正面に二条の稜線が走り三つの剥離面で構成されている。先端部は鋭く尖り左側縁に二次加工がなされている。望山からこれまで採集された縦長剥片のうちでの典型である。

二、石核

採集された石核は、全部で七点である。

すべて、硬質頁岩を原材とする。基本的には円錐形の形態を備え、なお変形がある。大きく三群に分類できる。

(1) 第一類は单打面の円錐形石核の仲間である。本類は望山の石核の主流であり、七点中五点が所属する。第26図の13・14、第27図の3・5がこれに該当する。

第26図13は半調整打面を持つ長円錐形石核である。打面と剥離面とのなす角度は九〇度に近い。両側面に原礫の自然面を残しているから、剝離作業が始まつたばかりの段階である。高さ68mm。

14は望山の石核中、最も丹念に整調された打面をもつ円錐形石核である。楕円形状の大きな打面の全周縁から平均した剝離作業がくり返されたことを示している。側面に緻密な剝離面を見せる。打面の長経と剝離面の高さが62mmとほぼ同長であるため、側面は正三角

形状を呈する。

第27図の3は、第26図の14と同類の石核である。調整された大きな打面が特徴である。このため、短円錐形状となる。この種の石核から得られたフレイク(剥片)の剥離角は一二〇度前後となろう。

4は、凹面の半調整打面をもつ石核で、望山の石核の典型であろう。剝離は全周に亘るが、正面と背面の剝離作業が優越するため、先端は扁平となる。

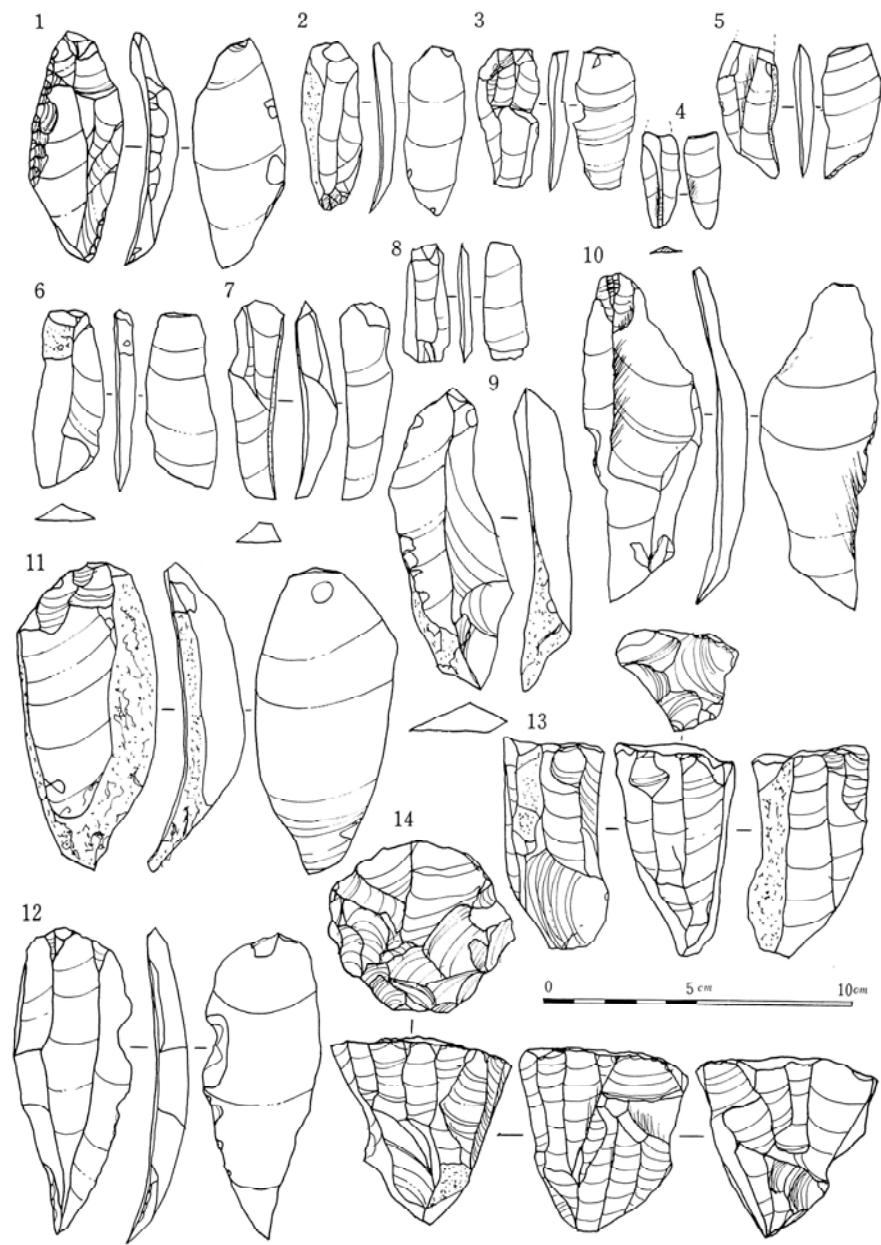
5は、チヨコレート色の色質の頁岩を原材としている。剝離作業が再調整された打面の片面から集中的に行なわれるという技術工程の結果、平面に原礫の自然面を残す。側面に五条の剥離面を並列させている。

(2) 第二類は上下両端に打面を備える石核である。第27図の1がこれである。

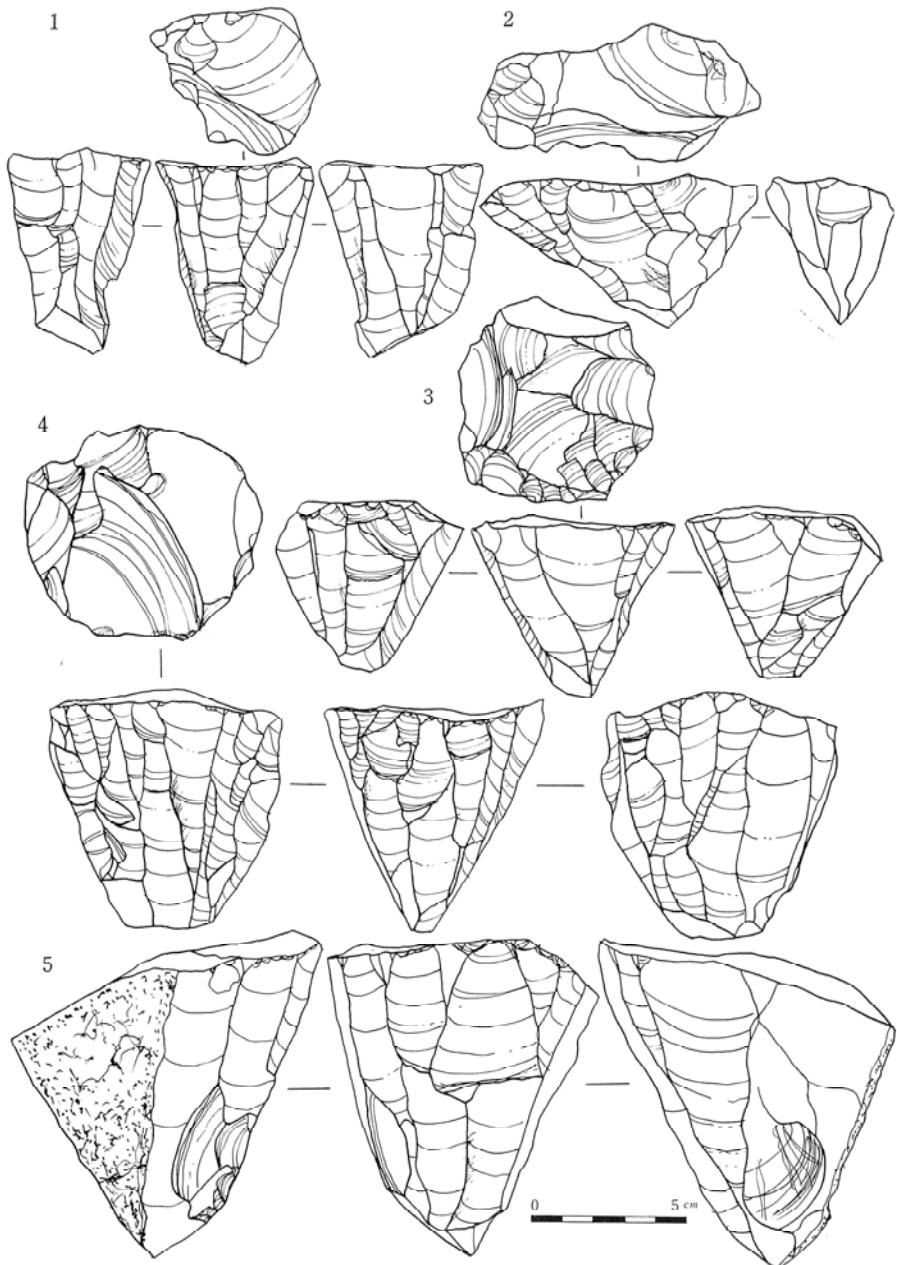
剝離工程は、上下の両打面から交互に行なわれるのではなく、ほとんどの上端の打面に依存している。このため、円筒形とならない。下端の打面は非調整である。

(3) 第三類は、いわゆる、舟底形をとる石核である。第27図の2がこれに属する。打面は不規則な剥離面によつて凹凸をなす。剝離は定則的でない。いかなる目的をもつ石器か石核か検討の要がある。以上望山の石核を概観したが、共通的な要素を挙げると、

- ① 円錐形石核を基本とする。



第26図 望山遺跡の石器類(そのI)



第27図 望山遺跡の石器類（その2）

② 全般的に打面が大きい。

③ 打面は調整打面を基本とする。

④ 自然面を残存するものが多い。ことなどが指摘できる。

さて、望山の石器文化に一定の解釈を与えると評価を下すことは、現段階では困難である。表採資料であるため、資料としての根本的な弱点を免がれることによる。石器の組み合わせ・形態・出土層位が正確に把握された時、望山の石器製作技術が解明される。單に、石器の形態論に根拠をおく解釈は危険であるが、一応の予察をしておきたい。

望山石器文化は石刃技法の原則に立っていると判断出来そうである。特に石核に石刃技法の定則性がうかがえる。一応先繩文文化の範疇の中で評価できそうである。しかし石刃と判断出来る資料が含まれていないのが気がかりである。文中で石刃核・石刃の名称を使うこと避けたのはその意味からである。

(二) 小見 遺 跡 (第28図)

小見遺跡から採集された一四点の石器類を第28図に示した。以下挿図を中心に簡単に説明を加えよう。

A 搗 器 類

第28図の1は縦長剝片(石刃?)を利用した摗器である。左右両側縁と正面中央の稜線が互いに平行して走る。打面・打瘤ともに小さい。背面(主要剝離面)先端は、やや蝶番破碎(ヒンジフラクチャ)

ー)をなす。正面先端部のリタツチ(整形加工)は明確でないが器の形態論からすれば縦形摗器であろう。長さ九一mm、幅二八mm。

2は打面を大きく残す縦長剝片を利用した石器である。先端、おび右側縁にも二次加工が加えられているが、左側縁により集中した加工が施される。サイドスクレーパー(側面に刃のある摗器)かナイフ形石器であろうか、長さ六五mm・幅二七mm。

3は部厚い剝片を摗器につくり上げた。先端から左側縁にかけて整形してある。基部を欠損しているが、摗器としての典型的な形態を備える。幅三〇cm。

B 縦 長 剝 片

第28図の4は図示した一点の剝片中、最も形の整った縦長剝片である。正面には二本の稜線が走り、剝離面を三面並べている。左側線は弓状に彎曲し、右側線には自然面をとどめている。

主要剝離面とは逆方向からの剝離面をのぞかせているのが注意される。打面は小さく、剝離角は九〇度に近い。先端を消失している。幅二四mm。5は短冊形をした不整形剝片である。二次加工は全く観察されない。6は、三角形の大きな打面を残す剝片。自然面を残し、基部がねじ曲がっている。幅二二mm。

7・8はともに、先端を消失したやや幅広の剝片。打面はやはり小さい。8は打面から両側縁にかけて緻密なリタツチ(整形加工)を加えている。

9は幅広の剝片。打面から先端部に行くに従い幅を増す。二次加工は全くなく、第一次剝離のままである。先端に自然面を残留している。長さ五四mm、幅三〇mm。

10は基部、先端とも欠損した薄手の剝片である。全体形が長方形をなし、両側縁に沿って二条の稜線が縦走する。幅二二mm。

11は打面の小さな、細長の小剝片。先端を欠く。幅一八mm。12は、中ふくらみの小形縦長剝片。側面、背面とも加工が見られない。長さ六八mm、幅二一mm。13は先端の尖る剝片。正面右側縁に自然面が認められる。二次加工全くなし。長さ七〇mm、幅二二mm。

14は広幅の不整形剝片。正面には逆方向からの剝離がある。長さ八八mm、幅四〇mm。

小見遺跡の性格を論ずるには、なお基礎的な作業の集積を俟たねばならない。

確かに、先繩文時代の搔器とおぼしきものが含まれている。打面

が小さく、剥離角が九〇度に近い剝片のあるものは、石刃と酷似する。しかし、こうした要素をもつて、小見遺跡を先繩文時代の遺跡として、積極的に認定することは、現段階では性急な結論であろう。層位的把握をおくと、石器の型式論から、単に類似点をひき出して、石器文化の性格を云々することは常に危険をともなう。小見の石器群には先繩文文化的要素は見られるが、先繩文文化の階梯でとらえられるかどうかは、今後の研究課題として保留した

い。

(三) 庚申山遺跡(第29図)

庚申山の遺跡付近からは、頁岩製の夥しい石片が採集されている。そのほとんどは、單なる不定形の剝片である。自然の営力によって、物理的に破碎されたと思われる石片を含む。ある種の石器を意識的に製作する過程で生じた人工的剝片なのかどうか、判断に苦しむ石片が多い。

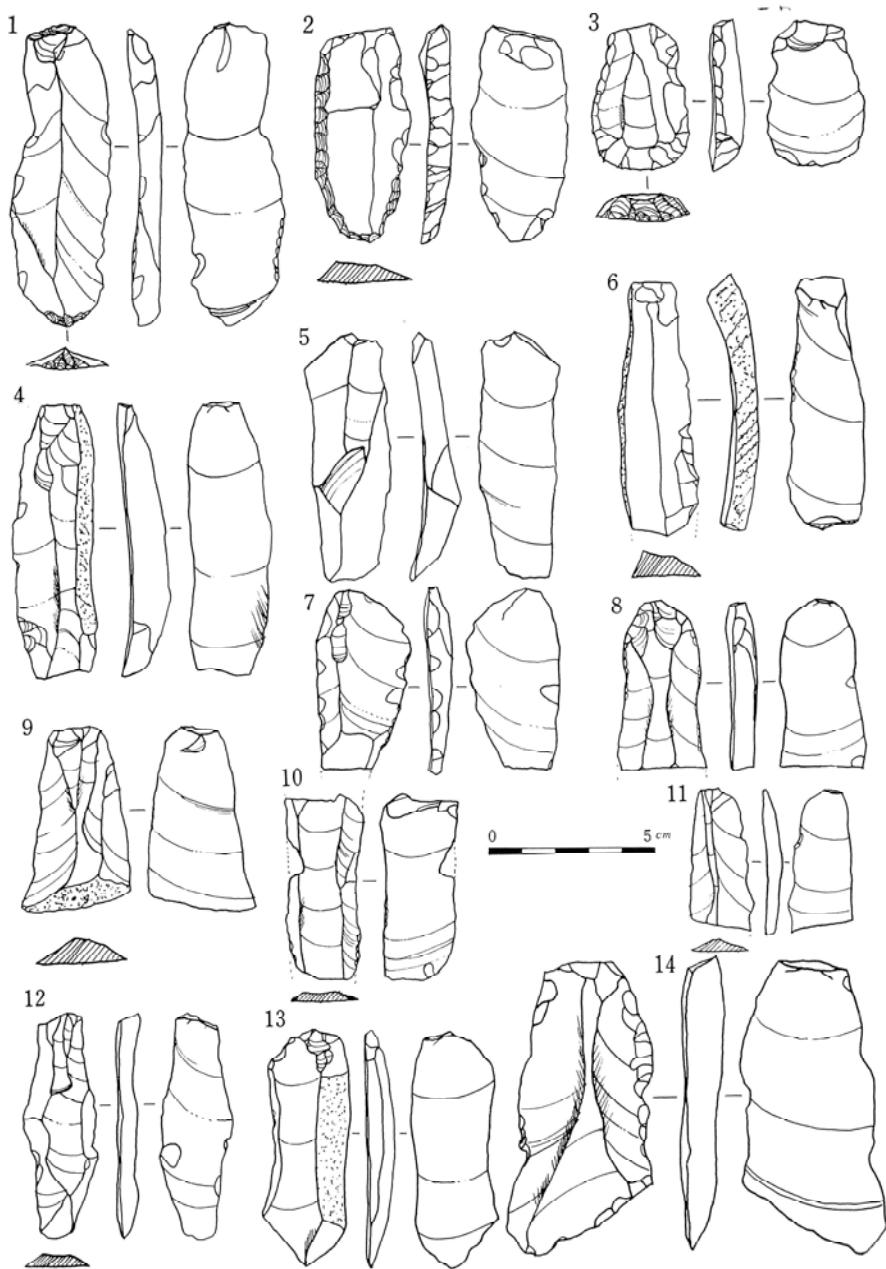
第29図に図示した一〇点の石器類は、人工品として確実に認定できるものである。

1は中央に稜線が走る、幅広い縦長剝片の全周に、角度の深いリタッチ(整形加工)を加えて完成している。左右の側縁は次第に広がりをみせるが、やがて幅を縮め最先端で交わる。全体形は菱形となる。背面には、原則として加工がなく第一次剝離のままである。

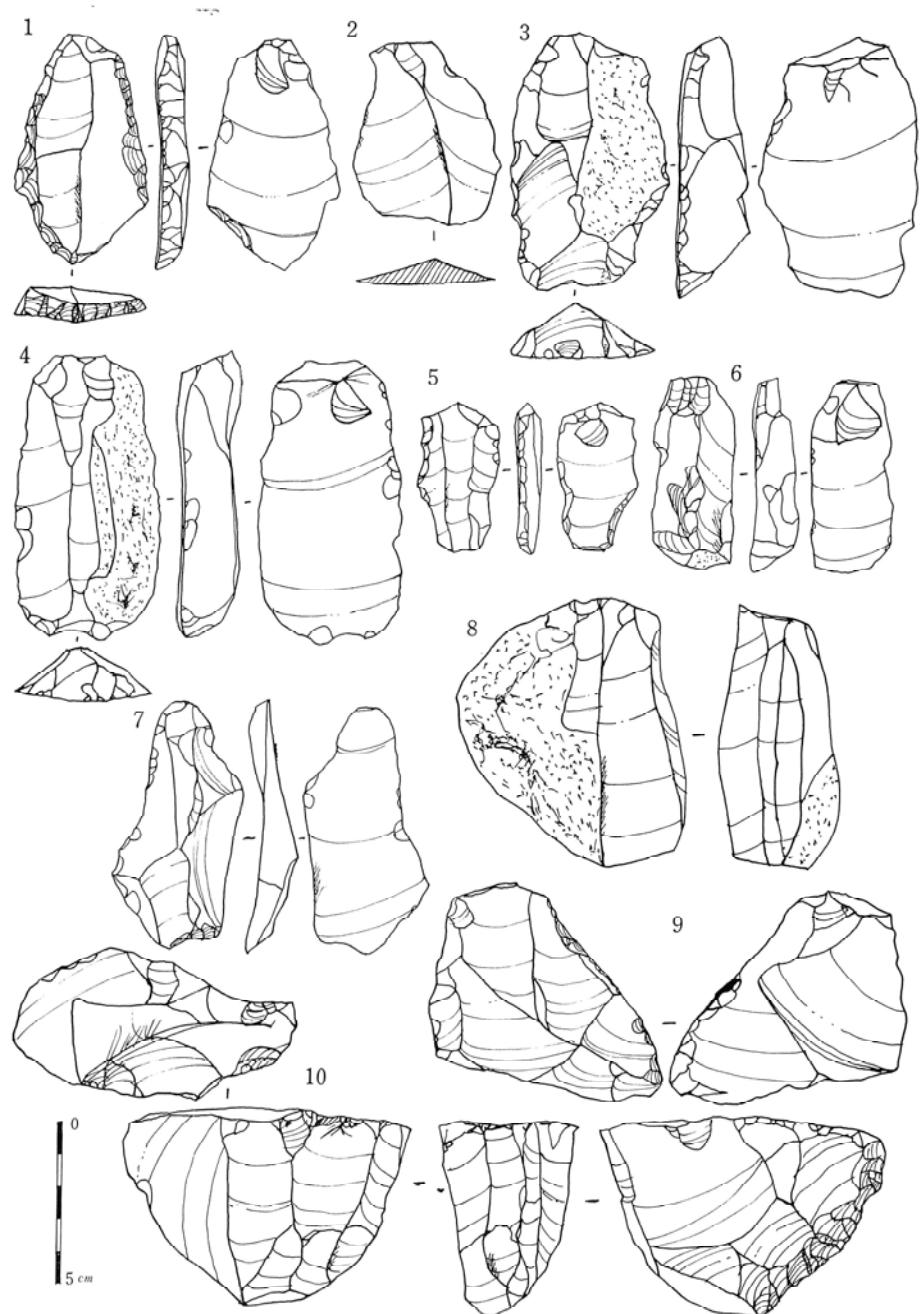
長さ七〇mm、最大幅四一mm。

3は、打面を大きく残す。部厚く幅広の縦長剝片。正面中央の稜線から左側縁にかけて自然面を大きく残す。又、背面(主要剝離面)の剝離方向とは逆の方向からの剝離が観察される。先端部の二次加工は粗雑で、所謂、搔器の刃部として認定することはむづかしい。長さ八mm、幅四七mm。

4は3と同じく、部厚い縦長剝片であろう。全体形が短冊形をなし、正面に二本の稜線が縦走する。右側縁に沿って、原石の自然面



第28図 小見遺跡の石器類



第29図 庚申山遺跡石器類

を残留する。先端部には加工らしきものがある。縦形搔器の刃部を作るという意図が不明確である。搔器として扱うには根拠がうすい。剝離角は約一三〇度で大きい。長さ八七mm、幅四五mm。

5は、正面中央に二本の稜線をもつ小形剝片を利用した石器であろう。大きな打面から左側縁中央にかけて、リタッチ（整形加工）を加え、つづいて主要剝離面（背面）の先端まで加工が及び、リタッチは、むしろ、主要剝離面に優勢である。長さ四六mm、幅二三mm。6はやや細身の剝片。正面、打面に近く剝離調整痕が密集している。打面、打瘤裂痕（バルバースカー）、ともに大きい。

7はプラットフォーム（打面）の小さな不整形剝片を利用した石器であろう。正面先端に逆方向の剝離が見られる。左右両側縁には原則として加工はない。先端部に加工を施して、凹形の刃部を作り上げている、コンケーブ・スクレーパー（中凹みの搔器）の一種であろうか。長さ七五mm、幅三五mm。

9は台形状の剝片を利用した搔器の仲間であろう。正面、右側縁にリタッチがある。長さ六五mm、幅五四毛。

8・10は石核である。

8は原礫の上部先端に横撃を加えて、平坦打面をつくり、そのまま打面として利用した非調整打面である。剝離は一方の側縁にだけ加えられ、大部分が原礫のままである。高さ八七mm、幅六五mm。

10は円錐形石核の類である。この石核は龍骨（舟底の舟首から舟尾までの稜線）が正されており、しかもそのための調整打がほどこされている。従つて単なる石核ではなく、舟底型石器と言えるであろう。

庚申山の石器文化を評価するには、未解決の問題があまりに山積している。

搔器と思われる資料や比較的、形の整った石刀核と目される石核も混っているが、なお、資料的不備が目立つ。資料はB地点から採集されたものが主であるが、図示した資料が、必ずしも正確な組成を代表しているかについては、なお検討を要する。そして、庚申山の夥しい石片碎片をどのように関連づけて解釈するかについても問題が残る。又、出土層位を正確に把握することも今後の課題として残るといえよう。

五、附記

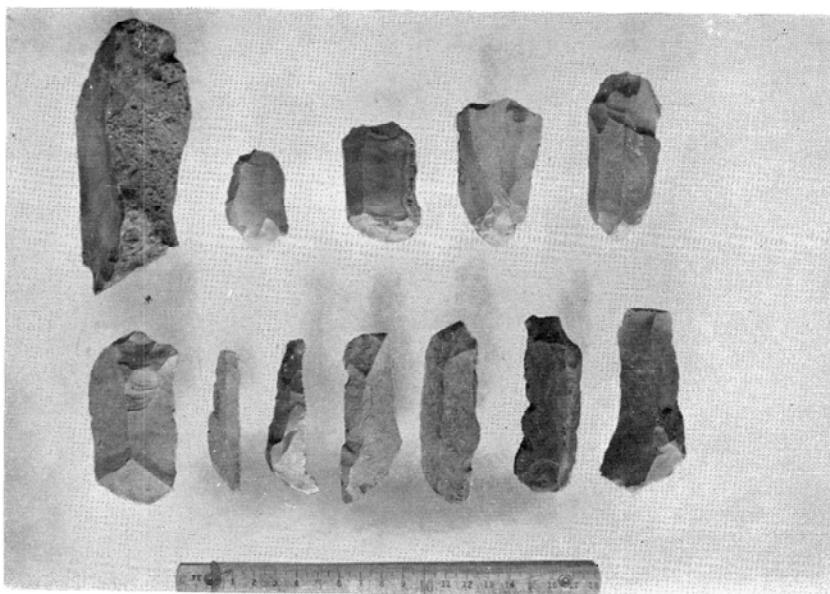
(一) 下原出土地

漆川一帯から剝片が出土している。例えば羽黒・壇・下原・下下原等であるが、下原Aは大字本郷字下下原己二三二で、大字本郷己ノ一九公平与呂氏所有地付近一帯である。ここは標高一二〇mに位置し、小見遺跡の対岸にある。月布川からは五〇mと一〇〇mの近距離で、河床からの比高一五mである。

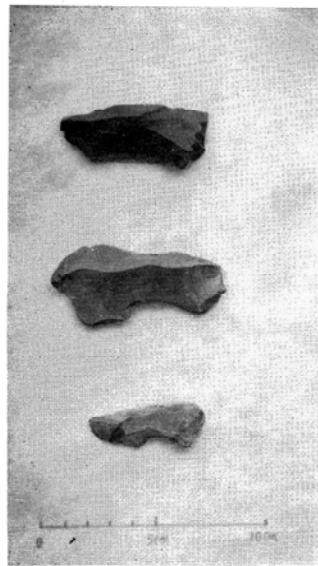
月布川はこの付近で大きく南に（小見側）に蛇行し、対岸を削つて崖をつくっている。数カ所地層調査の結果、第一層は置き土・表土は二五cmと三〇cm。第二層は漸移層五cm。第三層は砂礫層でこの河段丘を構成しているもの、第四層は左沢層（小見層）で第三系鮮新世層である。

下原杉林の中では、第二層の漸移層（第一層は置き土、および表土）から石刃型剝片が出土した（第31図・32図）。

尚、第30図上段の向つて右から四点は搔器（エンドスクレーバー）に属する。



第30図 下原出土の石器と剝片



第32図 前図の剥片



第31図 下原杉林内の層序と石刃型
剥片の包含状況



第33図 下原Bの地層調査

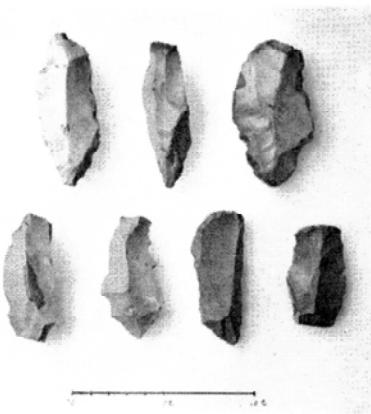
高山 渡辺教育長 沖津

(二) 橋上出土

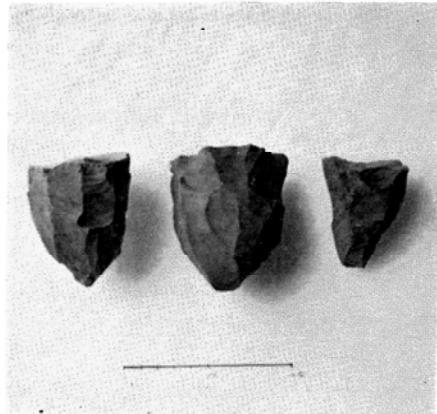
当地帶は月布川口から西（上流）へ六km、七軒街道の橋上バス停留所から北に三〇〇m、北部の月布川床に向かつて、なだらかな傾斜となつてゐる。この地は、月布川が北に蛇行し、向岸に当たる小鉄部落の南端を削り崖になつてゐる。また、標高一三〇mの月布川床から第一段丘比高一三m、第二段丘比高一二mと二つの河段丘より成り、遺跡は第二段丘標高一五五mの地に含まれてゐる。

付近は数年前、ホップ畑を經營するために、東西一〇〇m、南北三〇mの場所の表土が天地替えされた。採取された石器はこの際浮き出たものであるらしい。付近一帯の地層序は、第三系中新世の橋上層が基盤になり、その上が河段丘を構成している砂礫層、その上に二〇cm程度の黄褐色ローム層と思われるものが認められ、ローム層の上が表土との漸移層。表土は二五cm～三〇cmの黒土になつてゐる。

尚、第34図、第35図は橋上の渡辺正見氏の採取によるもの。



第35図 橋上遺跡出土の縦長形石器と剝片

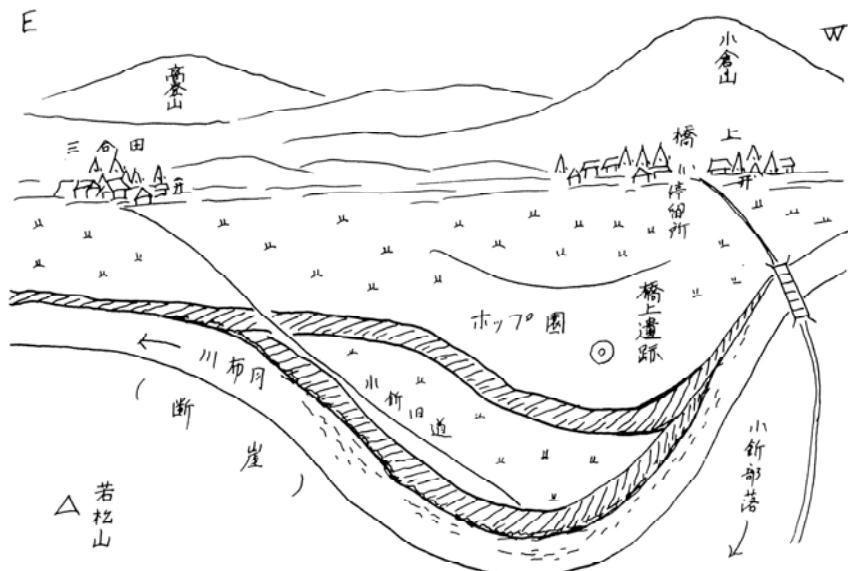


第34図 橋上遺跡出土石核



第36図 橋上遺跡—前面のホップ園—

第37図 橋上遺跡と河段丘

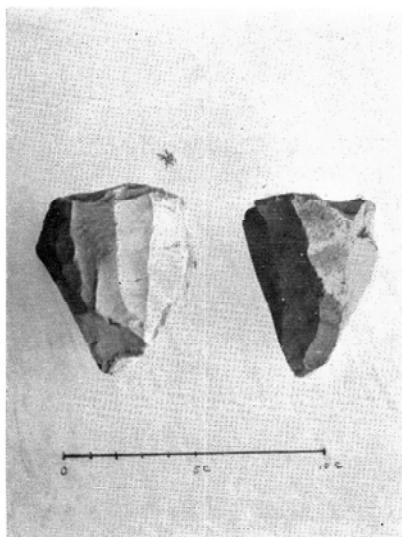


(三) 向原出土地

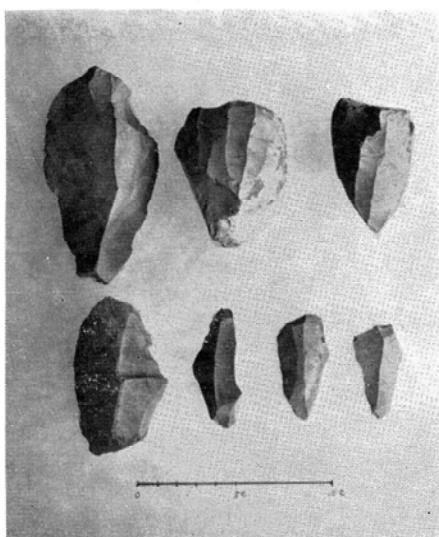
向原は月布川河口の東向いの台地で、左沢小学校の最上川向い
で、寒河江市地内になっている。標高一一五m。昭和の初期までは
一帯は松林又は桑園であったが、終戦の頃から水田に開拓された。
最上川床からの比高一五m。

この台地は主として最上川による河段丘で、如何にも原住民の生
活がうなづかれる台地である。層序は左沢層が基盤となり、最上川
岸に浸蝕された露出断面が見受けられる。その上がこの河段丘を構
成している砂礫層の堆積で、その上を五〇cm程度の表土が覆ってい
る。

ここから出土した核石をみると、これまで紹介した望山・橋上に
比し第38、39図に示すごとく剝離が一層鋭く、美しい橈状を示し
ている。核石の外に縦長剝片も數個採取されているが、資料不足の
ため今後の研究に待たねばならぬ部面が多い。ともかく、石や剝片
の形態からみて、今後が期待される地帶である。

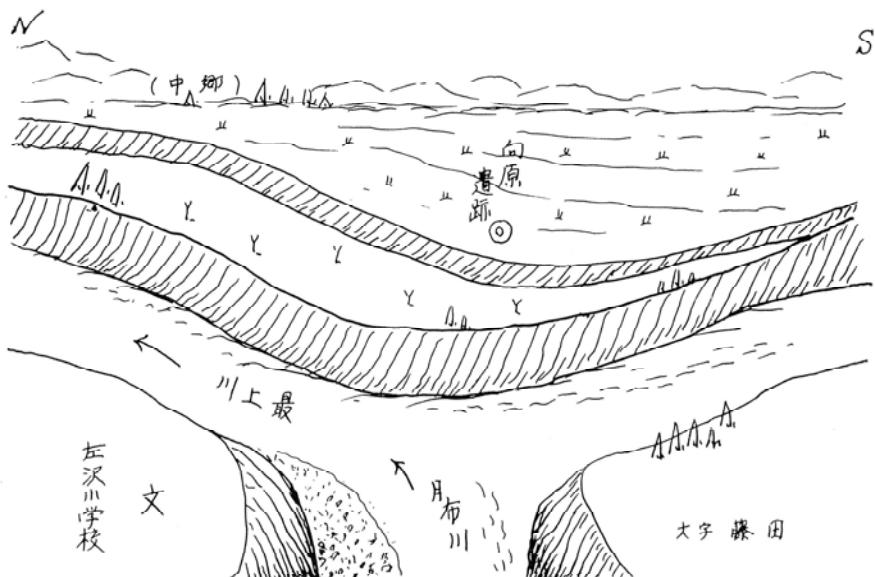


第39図 向原出土の石核

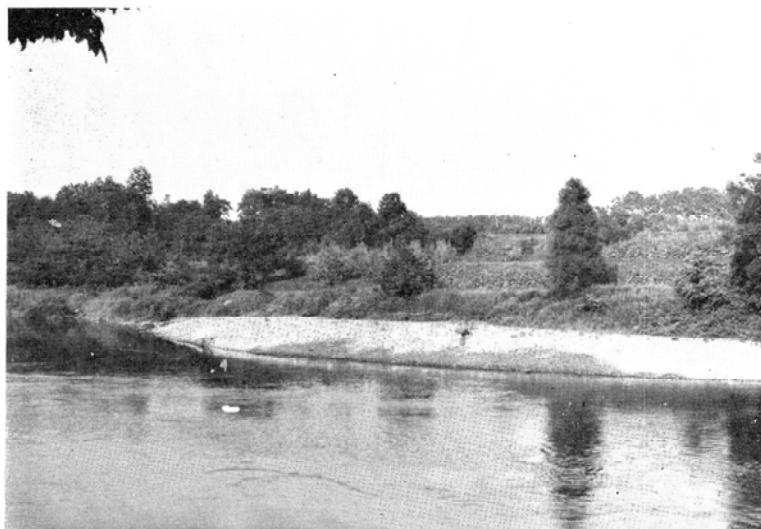


第38図 向原出土 石核と剝片

第40図 向原遺跡と河段丘



第41図 向原河段丘



下は最上川、帯状の白い線は左沢層の露出面、杉の根元まで第一段丘、頂点が第二段丘に当たる。月布川口より撮る。

六、結び

資料すらない現状である。

以上、月布川下流沿岸における、六カ所の古式石器出土地帯について紹介したが、これらの中には前述の通り、現段階において、すでに先繩文時代のものと予想されるものが、かなり出土している現況にある。従つてこの報告書も、今後における月布川一帯、及び最上川中流における研究への、一つの足がかりになることを念願して進めたものである。

これが大江町当局並びに町民の方々の要望しておられる、大江町における原始時代の生活を推考するための一助ともなれば、幸甚と考える次第である。勿論、今後六カ所以外にも出土地帯が予想されるし、現に出土しつつある地帯もあるので、今後の進め方によつては、更に系統的で組織的な考察が可能となることは勿論である。あらためて、引き続き検討を要すべき部面について述べると、

一、月布川沿岸に連なる河段丘を構成している堆積層の年代的考察。

二、小見・庚申山・橋上・寒河江市高瀬山を結ぶ一連の表土層の下に介在する、黄褐色粘土層（ローム層？）に対する解釈。

三、庚申山堆積河段丘の一部は頁岩礫を含んでおり、この礫を利用して石器を作つた訳であるが、こうした出土礫のままを利用した実状については、まだ発表された例が見当たらない。比較すべき

岩礫を割つてみて、その積み重ねによる体験から生み出された検討が必要であると考える。

四、出土地帯の中には石核と搔器との組み合わせにより構成されている場所もあるが、これは一つのケースとして、他の遺跡との比較対照によつて、より確かに解釈されるものと考える。

五、河段丘の標高、並びに河川からの比高及び四囲の環境と、古式石器との関連性についての検討。

等を挙げることが出来よう。

要するに、出土資料の形態的考察と共に、正式な発掘調査することによつて、より科学的な立場の立証が可能となり、特に表土から底土に至る層序を正確に把握することによつて、より適確な解釈が生まれ、眞の成果を挙げ得るものと深く期待する次第である。

昭和四十二年三月三十日発行

山形県西村山郡大江町

発行編集者兼
大江町教育委員会

山形市和合町二丁目一番地

印刷者
武田紙工株式会社
武田好吉